

日本におけるノンネイティブ日本語教師に対する  
効果的な研修

横田 隆志

The effective training for Non-native Japanese language teachers in  
Japan

Takashi Yokota

# 日本におけるノンネイティブ日本語教師に対する 効果的な研修

横田隆志\*

The effective training for Non-native Japanese language teachers in  
Japan

Takashi Yokota\*

*Received May 31, 2017*

## Abstract

There are many non-native Japanese teachers teaching at Japanese language educational institutions outside Japan. It is natural that native Japanese teachers conduct classes in Japanese education in Japan, however there is not much discussion concerning the existence of non-native Japanese teachers. The subject of language education has shifted from the teachers to the learners, and the role of teachers has changed from teacher guidance type to self-sustaining learning support in contact situations. For this reason, non-native Japanese teachers in Japan have recently increased and research on the role of non-native Japanese teachers, their necessity and merit etc. are beginning to be discussed.

Hokuriku University has also adopted non-native Japanese teachers from Chinese partner universities where they teach Japanese to foreign students in Japanese. Also, Japanese teachers regularly conduct teacher training sessions about Japanese language education. Many of the teachers have experience of staying in Japan and Japanese language education in China, yet it is their first time to teach Japanese in Japan. Currently, we do not understand what they think about non-native Japanese teachers in Japan, and what they think about the teacher training sessions.

Therefore, through semi-structured interview surveys, I would like to clarify what they thought about Japanese-language education after having come to Japan. This will clarify what non-native Japanese teachers have noticed from the training and how they think about the training sessions. From these results, we can consider more effective training methods for non-native Japanese teachers.

## はじめに

日本以外の日本語教育機関で日本語を教える仕事に携わっているのは主にノンネイティブ日本語教師である。しかしながら、日本国内での日本語教育では主にネイティブ日本語教師が授業を行うことは暗黙の前提となっている場合が多く、ノンネイティブ日本語教

---

\*国際交流センター International Exchange Center

師の存在についてはあまり議論されていない(横田 2014)。また、石井(1996)は、教師の意識としてもネイティブ日本語教師はノンネイティブ日本語教師よりも優れているという意識が存在していると述べている。

しかしながら、言語教育の主体が教師から学習者へと移っており、教師の役割が教師指導型から接触場面における自立学習支援に変化している。日本語教育において、教師は日本語についての知識を一方的に教授するのではなく、学習者の自立を促すためのサポート役へと役割が変わりつつある。また、日本語教育も「非日本人」を「日本人化」することから日本語を使用してのコミュニケーションの育成が中心となっている。更には、学習者の多様性やそれに対応するために教師も多様化している。このような背景から最近では日本でのノンネイティブ日本語教師も増加しており、その役割、必要性やメリットなどについても述べられ始めている(陳 2012、横田 2013)。

北陸大学でも 2004 年から中国の友好大学からノンネイティブ日本語教師の受入れを行っており、留学生に対して、日本語で日本語の授業を行っている。また、日本語教育の改善のため、日本語教員間で日本語教育に関する研修を定期的に行っている。彼らの多くは、日本での滞在経験や中国語教育の経験はあるが、日本で日本語を教えるときは初めての経験である場合が多い。しかしながら、受入れ側がノンネイティブ日本語教師が日本で日本語を教えることについて日々どのように感じているのか、研修に関してどのように思っているのかを把握していないのが現状である。

そこで、本研究では、北陸大学に在籍するノンネイティブ日本語教師が日本で研修を受けることにより、どのようなことを発見し、それを授業にどのように還元しているかを調査する。来日直後、来日後の日本語教育についての研修を通して考えたことやそれを授業にどのように生かしていったのかを具体的な語りに重点を置き、半構造化インタビューを行う。それにより、ノンネイティブ日本語教師が研修からどのようなことに気がついたか、研修を受けることによってどのように考えが変化したか、それをどのように授業に生かしているかを明らかにする。そして、この結果からノンネイティブ日本語教師に対する効果的な研修について考察する。

## 2. 中国人ノンネイティブ日本語教師の研修

中国の大学における日本語専攻(大学生用)の指導要領として、中国教育部により定められた『高等院校日語專業基礎階段教学大綱』と『高等院校日語專業高年級階段教学大綱』<sup>1</sup>がある。従来の文法教育中心からコミュニケーション能力を重視することが明確に規定されており、日本語教育の方法も変化しつつある(于 2002)。しかし、坪根他(2014、2015)の中国人日本語教師のビリーフ調査によって、言語能力についてはやはり知識が重視されており、教師は日本語についての知識を備えている絶対的な存在であると考えていることが明らかにされている。この原因としては、日本語学習者も教師から日本語の文法や単語を教えてもらいたいという意識が強いことも挙げられている。また、「実践的な日本語」や「考えさせる授業」を意識する新人日本語教師もいるが、教育現場では伝統的な教え方が主流であり、「学習者主体」や「コミュニケーション重視」の日本語教育を行うことは難しく「知識重視」の従来の教え方で日本語を教えることによる葛藤を抱いている教師もいる(坪根 2015、2016)。中国人日本語教師に対するライフヒストリーアプローチ<sup>2</sup>での研究には、森脇他(2012)、康他(2013)がある。森脇他は、中国人日本語教師のライフヒストリーから一斉授業の形式をとり、全体を教えながらも学習者個人を見ながらそれぞれに応じた対応をしていることをインタビューの分析により明らかにしている。また、康他

(2013)は中国の大学で日本語を教える教師を4つの世代に分類し、それぞれの時代の教師のライフストーリーから日本語教育についての意識を分析しており、学習者の急激な変化に対応するために実践を改革している様子が分かる。

ノンネイティブ日本語教師の研修については一般的に①日本語運用能力の向上、②異文化理解の視点からの日本事情や日本文化の理解、に重点が置かれている(福岡 2012)。そのため、日本語の能力は非常に高いが、日本語を教えることについてはほとんど学んだ経験がないという教師が多い。また、授業に関してはネイティブ日本語教師の授業がモデルとなり、モデルの授業に近づくことがよい教育であると認識しているノンネイティブ日本語教師も多い。一方、日本語教育における教師教育は、一方的なトレーニング型から教師の気づきや学びあいの場を作ることで、自分自身の授業を振り返る自己研鑽型の教師の養成へと変化しつつある。このような教師研修の変化に伴って、ノンネイティブ日本語教師の研修も自分自身の教育観を知り、自分自身の授業について振り返ることにより新たな気づきを得て、成長する研修が試みられている(八田 2008、八田他 2012)。そして、そのような研修によって、教師ビリーフスが変化したり、教師としての成長がみられたりしたことが報告されている。更に、菊岡他(2017)では、ノンネイティブ日本語教師に対して、課題遂行型を重視した日本語教授法の基礎を集中的に研修することにより研修者が自分自身の授業を振り返り、自分自身の教え方の変化の必要性に気づいたことが報告されている。

学習者の変化や教育トレーニングの変化から中国の日本語教師の教育の目的も従来の知識重視型だけではなく、コミュニケーションを重視する教師も増えてきており、授業に対する考え方も変わりつつある。このような状況での教師研修もネイティブ日本語教師とノンネイティブ日本語教師が違った研修を行うのではなく、同時に行うことにより相互での成長が見られる。

### 3. 北陸大学でのノンネイティブ日本語教師と課題

北陸大学では、2004年から「2+2編入留学制度」<sup>3</sup>の導入に伴って、中国の姉妹校から日本語教師の受け入れを開始した<sup>4</sup>。友好大学の教員は1年間、ノンネイティブ日本語教師として、北陸大学で日本語の授業を担当する。姉妹校からの日本語教師の採用についての本来の目的は、①学生確保のため、②学生の生活支援のため、であった。しかし、現在は、日本におけるノンネイティブ日本語教師の役割やメリットも明確になっており(横田 2013)、毎年3名のノンネイティブ日本語教師を採用している。彼らの日本語能力に関しては日本語使用者としても問題なく(OPI<sup>5</sup> 上級・超級)、日本語教育に関しても、中国の大学で日本語教育の経験がある教員を採用している。日本語の授業については、中国語を母語としない学習者もいるため、基本的には日本語のみで授業を行っている。また、担当科目については聴解、読解、作文、会話とノンネイティブ日本語教師が担当する科目と同じ科目を担当している。

横田(2014)は、3人のノンネイティブ日本語教師に日本で日本語を教えることについてどのような意識があるか調査を行った。来日前、来日直後は、彼らの頭の中に「ネイティブ日本語教師>ノンネイティブ日本語教師」という意識があり、日本で日本語だけで日本語教育を行うことには不安を感じていた。しかし、日本語教育の経験は長いので、実際には日本語を教えることに関してはあまり問題がないということに気がついた。また、インタビューを通じて、改めてノンネイティブ日本語教師について考えることができ、その

体験からノンネイティブ日本語教師のメリットや必要性を感じるようになっていた。

しかし、このような気づきを得ることは一年間のノンネイティブ日本語教師の経験からであり、その後、彼らは帰国してしまう。もちろん社会貢献という視点からは問題ないが、北陸大学の日本語の授業に生かされていないのが事実である。また、インタビュー調査を行ったことにより、ノンネイティブ日本語教師のメリットを感じることはできたが、インタビューを行わないとノンネイティブ日本語教師のメリットを感じることは難しい。これまでのノンネイティブ日本語教師は、中国で行っていた日本語教育をそのまま日本で行い、新しい気づきもなく、「ノンネイティブ日本語教師はネイティブ日本語教師より劣っている」という考えのまま、日本での一年間の滞在を終えるノンネイティブ日本語教師が多かった。

## 4. 調査

### 4-1 北陸大学での研修

研修での目的は他の人が作成したシラバスや教授法をうのみにし、そのまま適用していくような受身的な存在ではなく、自分自身で自分の学習者に合った教材や教室活動を創造していくような自己研修型教師（岡崎・岡崎 1997）の育成であった。また、「インタビュー調査を通じて気づきを促すこと」が明らかになっているために定期的にインタビューを行い、①日本でのノンネイティブ日本語教師について、②JSL 環境<sup>6</sup>での日本語教育について、について毎回考えてもらうようにした。研修の具体的な内容については、学内での FD 研修の一環である授業見学や、日々の教育活動等をティーチングポートフォリオの資料として収集したりした。また、月に一回、ネイティブ、ノンネイティブ、非常勤講師など北陸大学で働く全ての日本語教師を対象として、日本語教師としてどのような工夫をしているか授業紹介やそのテーマに関わる座談会を行った。

### 4-2 調査概要と方法

北陸大学で 2016 年度に日本語科目を担当していた 3 人の中国人ノンネイティブ日本語教師を対象とし、半構造化インタビューを行い、そのデータを分析した。インタビューは日本語で行い、一回につき 50 分～80 分かけて行った。

インタビューの内容は、日本でノンネイティブ日本語教師として日本語を教えることについて、研修や日々の日本語教育を通して考えたこと、またそれに関する具体的な出来事についてであり、来日直後、一ヵ月後、前期終了時、後期終了時にインタビューを行った。それによって日本でのノンネイティブ日本語教師について、研修を通じて考えたこと、それを実践にどのように生かしているかを明らかにすることを試みた。

分析は質的データの分析手法である SCAT（大谷 2008）を使用した。インタビューを文字化し、コーディングを行い、ストーリーラインを作成した。そこから、ノンネイティブ日本語教師の研修やノンネイティブ日本語教師についての気づきを調査した。

表 1 調査対象者情報

対象者	教師歴
A（女性）	22 年
B（女性）	9 年
C（女性）	10 年

## 5. 考察

3人のノンネイティブ日本語教師がどのようなことを考えているのかをインタビューしたものをストーリーラインにしたものをまとめる。

### Aさん

#### 来日直後

日本で中国語を教えた経験はあるが日本語で日本語を教えたことはなく、不安を感じていた。日本語を使用して日本語の説明をすることはできるが、もし学習者が理解できなかったら中国語を使ったほうがいいのか悩んでいた。また、作文や会話の授業は中国ではネイティブ日本語教師が行うものであり、したことがない。どのような教材を使用したらいいのか悩んでいた。授業に関しては、中国で行っていた方法で日本語を教えようと考えていた。研修については、研修をするならばやはり日本語能力を高めることが一番であると考えており、専門分野での研究に役に立つようなことを行ってもらいたいという気持ちがあった。日本語教育に関しては、ネイティブ日本語教師の授業を見学し、よいところは自分の授業に取り入れたいと考えていた。

#### 一カ月後

中国人学習者以外の留学生と学習方法について話をすることができた。思っていたより日本語ができるので日本語を使ってコミュニケーションができることに気づき、安心して授業をすることができた。中国から持ってきたテキストが少なく、教えることが心配だったが、リスニングやリーディングの教材が身の回りにあふれていることに気づいた。ただ、どの素材を教材にするかは難しいと感じていた。研修ではみんなが自分の授業の悩みについて話していたので、自分の悩みについても話すことができた。中国ではこのような形の研修はなく、自由な雰囲気では話ができるのはよいと感じていた。また、ネイティブ日本語教師の話は初めて聞くような話も多く、中国の日本教育との違いも発見した。

#### 前期終了時

作文の指導について、最初は心配していたが、自分なりの工夫をし、教えることに対しての不安や心配はなくなった。教える際に自分自身が学習者だったときのことを思い出し、その経験を授業に生かすことができた。また、授業では答えを見つける学習よりもみんなで話し合いをしたり、考えたりしながら行った。これは日本についての知識や体験が学習者も持っており、学習者一人ひとりがそれらの知識や体験の捉え方が違うことが分かったからである。研修で考えた学生主体の教育を授業に取り入れてみたが、学習者には好評だった。研修で話すために今までしなかったような工夫を授業で行ってみた。

#### 後期終了時

中国でも日本語を使って日本語を教えていたので、日本語を使って教えることについては抵抗がなかった。また一年間の日本語教育で日本語で日本語を教えることは学生にとってもよいことだと思うが、文法や文化体験などは中国語で説明したほうが時間の節約ができると感じた。日本で教える際にはテキストよりも豊富な生教材が身の回りにあるので、それを上手に使うことによって学習者のコミュニケーションの向上のための教育ができることに気づいた。また、中国でもこのような生教材を使って授業をしたいと考えている。研修ではもっと他の先生の授業を見たかったが、自分自身の授業を見られることに抵抗が

あるために遠慮してしまった。その代わりにアルベス<sup>7</sup>を使用して、他の先生の授業を見た。この研修等を通じて、日本語教師としての自分自身を見直す良い機会を得た。日本に来る前は、教材に頼っていて、「教科書を教える」ことが教育の中心だったが、学生の成長を促す活動を今後は取り入れたいと感じていた。

## Bさん

### 来日直後

中国で日本語を使って日本語を教えた経験はなく、不安を抱えていた。特に、文法を日本語で教えることができるか非常に不安であった。また、作文や会話など中国ではネイティブ日本語教師が行う授業も担当することになり、どうしたらいいかわからなかった。また、どのようなテキストを使ったらいいかネイティブ日本語教師に聞いたが、果たしてそのテキストを上手に使うことができるか心配であった。そのため、日本での日本教育關してもどのように行うべきか分からなく困っていた。一方、試験対策等の授業は中国で行っていた方法で教えることができるので楽であると考えていた。研修では、日本に来たので日本の文化に関するさまざまな知識を得たいと考えていた。また、自分の研究に少しでも役に立つような研修も望んでいた。授業については日本人教師の作文や会話の授業を参考にしたいと考えていた。

### 一カ月後

作文の授業は実際にしてみると難しいことに気づいた。特に添削が難しく、正しい文に直すのが難しいと感じていた。一方、学習者とは日本語でコミュニケーションをとることができるので、学習に関する相談にも対応することができ、嬉しく思っていた。更に、国籍や母語は違うものの同じ日本語学習者と言う点から学習の方法に関する質問をたくさん受けた。学習者が「学生と教師」という関係ではなく、「学習者と成功した学習者」として自分に親近感を感じてくれ、学習ストラテジーなどの相談を受けることもあった。実際の授業では、日本のことについて話す際には日本にいると自然に入ってくる情報なので学生と議論することができた。中国にいたときには教師側は知っているが学習が知らないことがテーマとなった場合は、学習者の興味をひきつけることが難しかった。研修では、現場で困っていることについて話すことができるので便利であると考えていた。また、ネイティブ日本語教師の考えや教え方が違うことに気づいた。

### 前期終了時

心配だった作文や会話の授業も徐々に慣れてきて、作文や会話の授業に関して自信がでてきたと感じていた。作文や会話の授業をどのようにすればいいのかは自分自身が日本語学習者だったときの経験から考えることができた。また、日本についての知識は教師である自分は学生よりも豊富でなければならないと思っていたが、学生も日本で生活をしており、学生の持っている情報のほうが多いこともあった。しかし、そのことに対してどのように考えるかが大切であることに気づいた。学生から学ぶことは恥ずかしかったが、学生がテーマを持ってきてくれるので便利だと感じていた。このような体験や研修での他の教師の発表を聞いて、学習者主体の日本語教育について考えることができた。まだ上手に授業に取り入れているとは言えないが、これからも続けていこうと考えていた。

### 後期終了時

中国以外の国で日本語を教えることは初めてで、とてもよい経験ができた。前期は心配なことが多かったが、後期は研修等で考えたことを授業で実践できた。中国では教科書を

教えることしかしていなかったが、身の回りのさまざまなものが教材になることに気づいた。中国にいとテキストにある一つの情報からの議論はできるが、学習者が自分自身で収集した情報でインフォメーションギャップを使って議論することが日本での日本語教育のメリットだと感じた。研修ではそれぞれの教師の体験や授業の方法を聞くだけだったが、実際に授業を見てみることはしなかった。また、研修を通じて普段はあまり会う機会のない非常勤講師の先生とも交流ができた。

## Cさん

### 来日直後

日本語を使って日本語を教えることに対して心配であった。それは自分自身の日本語能力についてではなく、学習者が自分の日本語が理解できるかどうかという点が心配であった。また、中国では基礎的な日本語の科目を担当していたので、初めて担当する科目ばかりで大変そうだと感じていた。授業の準備をしているが、どのように行ったらいいのかも想像できない状態だった。中国の大学ではベテラン教師の授業を見学することが研修だったので、同じようにネイティブ日本教師の授業を見学し、自分の授業に取り入れたいと考えていた。特に、作文や会話の授業はネイティブ教師が本来行うものなので参考になると思っていた。

### 一ヵ月後

作文の授業では書き方に関するテキストはあるが、テーマの決め方などのテキストがあれば授業がやりやすいと思い、探していた。しかし、中国人以外の留学生から作文の授業に対する相談を受けたことや作文の授業に対してよい評価を得たことが嬉しかった。日本語で日本語を教えることは大変だが、学生が日本についての情報を得て、それに対して質問してくるので自分の考えを述べながら議論できる点に関して面白く思っていた。中国での研修ではある授業を見学し、それに対しての意見を言うことがメインだったが、自由に話し合いが進められるので、小さな疑問もその場で解消できると感じていた。また、中国での日本語教育についてネイティブ日本語教師が興味を持ってくれたのが意外だった。中国人に対する教え方についてみんなの前で発表できたことが少し誇らしく感じていた。

### 前期終了時

悩んでいた作文や会話の授業では元学習者としての経験を生かし、上手に教えることができたと感じていた。「ネイティブ日本語教師が行うべき」と考えていた作文や会話もノンネイティブ日本語教師でもできることに気づいた。研修から考えた「学習者に考えさせる授業」を実践することができ、学習者にもよい評価をもらった。また、考えさせる授業での話し合いを通じて学習者の日本語能力を高めることができた。学習者が興味を持って取り組んでくれるようなテーマを選ぶことは難しいが、学習者が積極的に課題に取り組み、議論をする姿を見てもっとよい教育を行いたいと感じた。研修では、ノンネイティブ日本語教師だからできることもあることに気づいて、それが自分のメリットであることを考えながら授業をすることができた。

### 後期終了時

中国では担当しないような科目を教えることができた。最初は授業の準備で大変だったが、「ノンネイティブ教師だから作文や会話を担当しない」というのは違って、ノンネイティブでも作文や会話の授業をすることができると気づいた。日本語を使って授業することを一年間常に意識しており、自分自身の教育に対する成長も見られた。クラスで



は学生に考えさせる授業を常に心がけていた。できる学生ができない学生と共に学んでいけるような授業ができた。中国にいたときには「正しい日本語」を学習者が使えるようになることを目標に授業を行っていたが、学生のコミュニケーション能力や考える力を伸ばせるような授業のほうが大切だと思うようになった。研修では普段、見えない他の先生の授業について知ることができ、自分自身の授業のヒントになることも多かった。

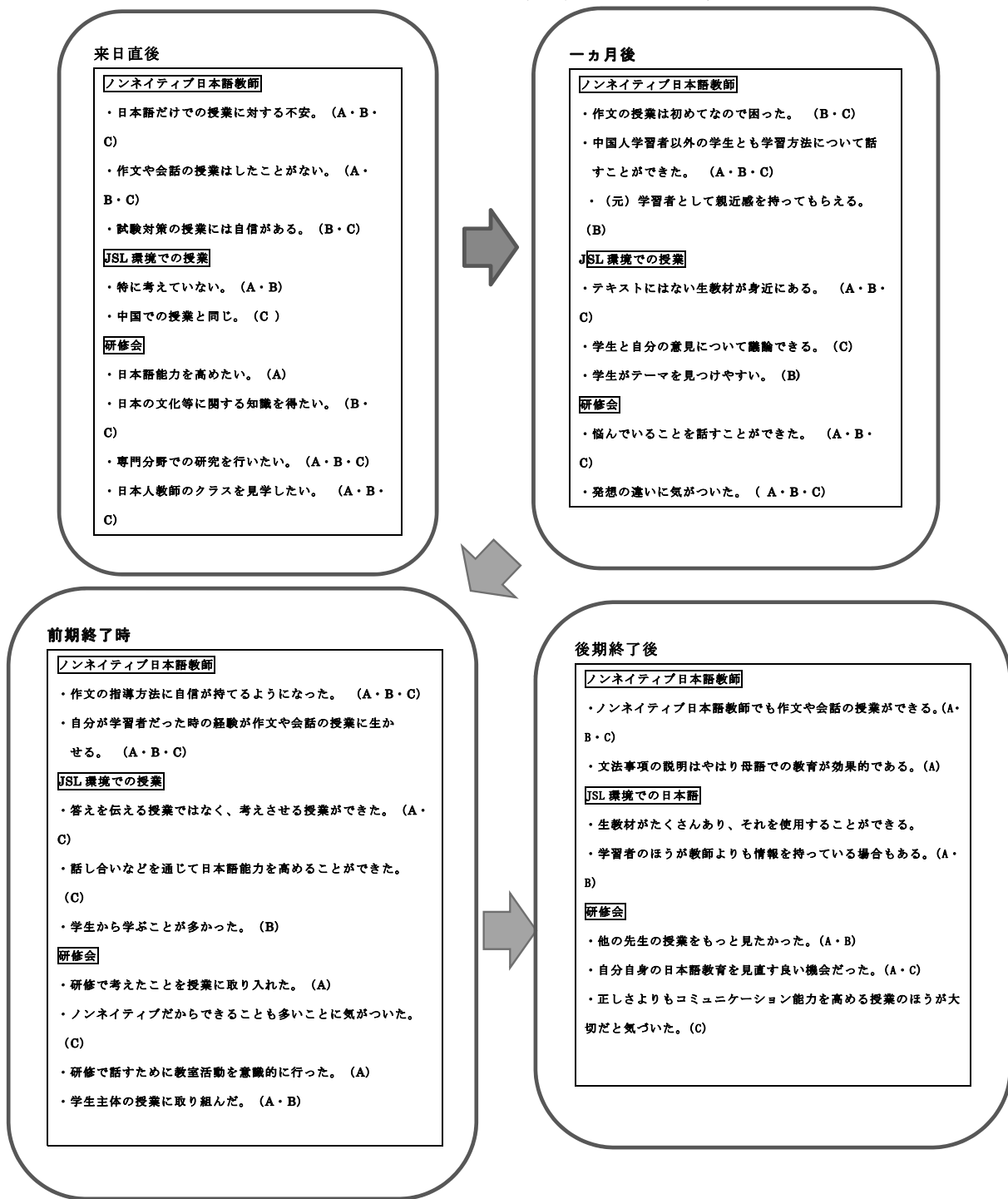
3人の調査協力者が感じたことを「ノンネイティブ日本語教師」、「JSLでの環境での日本語教育」、「研修会」について表にまとめてみる。

これらの研修を通じて、ノンネイティブ日本語教師の役割について教師自身が考えることができたことが分かる。3人とも最初は日本で日本語を教えることに不安を感じていたが、ノンネイティブ日本語教師だからそこできると生かせる特長に気づき、その必要性を感じることができた。また、作文や会話の授業を担当して、作文や会話はネイティブ日本語教師がするものであるという考えが変わったことが分かる。

JSLの環境では日本語教育はJFL環境での日本語教育とは違うので、違う方法で行わなくてはならないことに気がつき、それを実際の事業に取り入れながら教育を行うことができた。教材に関しては、「テキストを教える」ことを中心に授業をしていたが、テキストにない生教材がJSLでの環境にはあるのに気づき、それをどのように授業に取り入れようか工夫したことが分かる。また、中国では教師は学習者よりも「日本や日本語についての知識が多い」という前提で知識を伝える授業を行っていたが、日本では学習者のほうが情報を持っている場合も多い、そのため、その学習者の知識を生かした授業がでる。そして、その方法が学習者のコミュニケーション能力の向上を促す活動になることが分かった。

定期的に行った研修会からは「日本語能力の向上」ではなく、「日本語教育の改善のための情報」を得ることができた。自分自身が悩んでいたことを話すことで、教育についての気づきを得たり、ネイティブ日本語教師の授業での工夫を参考に授業改善を行ったりした様子分かる。また、研修で話すために教室活動を工夫し、それによって新しい発見もあったようである。研修を受けることで自分の日本語教育を振り返る機会を得ることができたと感じており、研修を行ったことに対して肯定的な意見が多かった。

表2 ノンネイティブ教師の意識の変化



## まとめ

今回は、北陸大学に在籍するノンネイティブ日本語教師が日本で研修を受けることにより、どのようなことを発見し、それを授業にどのように生かしているかを調査することができた。

調査では、教師自身がインタビューや意見交換会などで気づいたことを前期の段階から教育に取り入れていたことが分かった。結果としては、横田（2014）と同じようなものであったが、一年間滞在して気づいたものをかなり早い段階で気づき、それを授業に取り入れることができたのは北陸大学で学ぶ留学生にとっても有意義なものだったと思われる。ノンネイティブ日本語教師が自分自身の役割に気づき、自信を持って日本語教育に携わることができたということから今回のノンネイティブ日本語教師の研修には意義があり、このような形での研修は彼らにとって非常に効果的な研修であったと言えるだろう。また、今回の研修はノンネイティブ日本語教師のために行った研修だったが、研修を行うことによってネイティブ日本語教師が日本語教育について新たに発見する場にもなったように思われる。ただ、授業見学に関しては、授業を見るのが授業を批判されるかもしれないという不安からあまり行うことがなかった。この点に関しては、「授業見学は自分自身の振り返り」という点を強調し、今後、自由に授業を見学できるような雰囲気を作っていく必要があると思われる。

今後は、日本でのノンネイティブ日本語教師としての経験を帰国後の日本語教育にどのように生かしているかについて調査したいと考えている。

## 注

- <sup>1</sup>『高等院校日語專業基礎階段教学大綱』（2001年版）、『高等院校日語專業高年級階段教学大綱』（2000年版）
- <sup>2</sup> 研究対象になった人の人生の一部分を叙述することで、文化の分析と個人の人生がどのように関連するかを事例をもって表現する研究方法。
- <sup>3</sup> 中国の友好大学で年間、日本語を学んだ後に北陸大学に編入し、専門科目を2年間学び、卒業時に中国の出身大学と北陸大学の両方の学位が取得できるプログラム。
- <sup>4</sup> これまでのノンネイティブ日本語教師の受入れ

年度	人数	大学名
2004年度	3	北京語言大学・蘇州大学・南京大学
2005年度	3	北京語言大学・蘇州大学・南京大学
2006年度	4	北京語言大学・蘇州大学・南京大学・大連外国語学院
2007年度	4	北京語言大学・天津外国語大学・南京大学・大連外国語学院
2008年度	4	北京語言大学・天津外国語大学・西安外国語大学・大連外国語学院
2009年度	4	北京語言大学・天津外国語大学・西安外国語大学・大連外国語学院
2010年度	3	天津外国語大学・西安外国語大学・大連外国語学院
2011年度	3	天津外国語大学・西安外国語大学・大連外国語学院
2012年度	3	天津外国語大学・西安外国語大学・大連外国語学院
2013年度	3	天津外国語大学・西安外国語大学・大連外国語学院
2014年度	3	天津外国語大学・西安外国語大学・大連外国語学院

2015年度	3	天津外国語大学・西安外国語大学・大連外国語学院
2016年度	3	天津外国語大学・西安外国語大学・大連外国語学院

- <sup>5</sup> ACTFL (The American Council on the Teaching of Foreign Languages、全米外国語教育協会の略称) によって開発された外国語の口頭運用能力を測定するための会話能力テストである「oral proficiency interview」のこと。インタビューによって学習者の言語運用能力を測定する。超級、上級は非常に高いレベルである。
- <sup>6</sup> ”Japanese as a second language” 日本における日本語教育環境のこと。
- <sup>7</sup> “Real Video Education System” 教室での講義をビデオ収録し、インターネット上に配信し、視聴することができるシステム。

### 参考文献

- 阿部洋子・横山紀子 (1991) 「海外日本語教師長期研修の課題 一外国人日本語教師の利点を生かした教授法を求めて一」『日本語国際センター紀要』第1号 国際交流基金日本語センター
- 荒川洋平 (2009) 『日本語という外国語』講談社
- アルク (1994) 「ライバルは『ノンネイティブ日本語教師』」『月刊日本語』9月
- アルク (2002) 「日本語学習者に大接近！」『月刊日本語』2月
- 石井恵理子 (1996) 「非母語話者の役割」『日本語学』Vol. 15 No2 明治書院
- 于曉渦 (2002) 「中国の大学における日本語教育の展開と今後のあり方について—大連外国語大学における日本語専攻カリキュラムの分析を通して—」『教育学論集』28
- 大谷尚 (2008) 「4ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案—着しやすく小規模データにも適応可能な理論化の手続き」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学)』Vol. 54, No. 2
- 岡崎眸 (2005) 「多言語・多文化共生時代の日本語教育—共生言語としての日本語教育」『言語教育の新展開』ひつじ書房
- 岡崎敏雄・岡崎眸 (1997) 『日本語教育の実習:理論と実践』アルク
- カイザーシュテファン (1995) 「ノンネイティブ日本語教師の役割 異文化教育現場としての日本語教育を目指して」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』10
- 加納千恵子 (2010) 「大学院における日本語教師養成の課題: ネイティブ・ノンネイティブによる教師役割観の違い」『国際日本研究』2
- 川口義一・横溝紳一郎 (2005) 『成長する教師のための日本語教育ガイドブック』ひつじ書房
- 菊岡由夏, 篠原亜紀 (2017) 「課題遂行を重視した教授法科目のコースデザイン—ノンネイティブ日本語教師を対象とした教師研修から—」『国際交流基金日本語教育紀要』(13)
- 康鳳麗・森脇健夫・坂本勝信 (2013) 「中国における中国人日本語教師のライフヒストリー研究—コホートによる授業スタイル形成の相違に着目して—」『鈴鹿医療科学大学紀要』20
- 田中里奈 (2013) 「日本語教育における『ネイティブ』/『ノンネイティブ』概念」『言語文化教育研究』11

- 陳良慶(2012) 「教育実習を通じて見えてきた非母語話者日本語教師の利点」 『国際教養大学専門職大学院グローバル・コミュニケーション実践研究科日本語教育実践領域実習報告論文集』 3
- 坪根由香里・小澤伊久美・嶽肩志江・八田直美 (2016) 「『実践的な日本語』 『考えさせる授業』を意識する中国人日本語教師」 -その背景と彼らが目指す授業- 『大阪観光大学紀要』 第16号
- 坪根由香里・嶽肩志江・小澤伊久美・八田直美, 嶽肩志江, 小澤伊久美 (2015) 「『いい日本語教師』に関する中国人新人教師のビリーフ -PAC分析の結果から-」 『大阪観光大学紀要』 15
- 八田直美 (2008) 「国際交流基金バンコク日本文化センターによるタイ人日本語教師のための『水曜研修』」 -ノンネイティブ教師研修における学び合いと研修成果の教育現場での実践- 『国際交流基金日本語教育紀要』 第4号
- 八田直美・小澤伊久美・嶽肩志江・坪根由香里 (2015) 「ノンネイティブ新人日本語教師にとっての研修の意義」 -PAC分析によるタイ人新人日本語教師のビリーフ調査から- 『国際交流基金日本語教育紀要』 第8号,
- 八田直美, 小澤伊久美, 嶽肩志江, 坪根由香里 (2012) 「ノンネイティブ新人日本語教師にとっての研修の意義 -PAC分析によるタイ人新人日本語教師のビリーフ調査から-」 『国際交流基金日本語教育紀要』 (8)
- 福岡昌子 (2012) 「〈実践報告〉海外のノンネイティブ日本語教師のための日本語集中講座の実践」 『三重大学国際交流センター紀要』 第7号
- 古市由美子 (2005) 「他言語多文化共生日本語教育実習を通してみた非母語話者教師の役割」 『小出記念日本語教育研究会論文集』 13
- 森脇健夫・康鳳麗・坂本勝信 (2012) 「熟練日本語教師の力量内容とその形成 - ライフヒストリー的アプローチによる日中の日本語教師の授業スタイルの形成研究 -」 『三重大学教育学部研究紀要』 第63巻
- 横田隆志 (2013) 「留学生の日本におけるノンネイティブ日本語教師に対する意識調査」 『CAJLE2013年次大会 Proceedings』
- 横田隆志 (2014) 「日本におけるノンネイティブ日本語教師の意識調査」 『CAJLE2014年次大会 Proceedings』

Bachman, L.F. (1990). *Fundamental Considerations in Language Testing*. Oxford: OUP.

Cook, V. (1999). *Going beyond the native speaker in language teaching*. *TESOL Quarterly*, 33(2)

Holliday, A. (2005). *The Struggle to Teach English as an International Language*. Oxford: Oxford University Press.